

リオデジャネイロ日本人学校実践報告

～ 多くの出会いに支えられて ～

網走市立白鳥台小学校

教諭 森 奈穂

1 ブラジルについて

- (1) **地理・言語** ブラジルは地球儀で見ると、日本の対蹠地にある最も遠い国です。国土は日本の約22.5倍もの面積があり、アマゾン、パンタナール、カマデプイなど、広大でダイナミックな自然と多様な動植物、資源を有しています。～ブラジル基礎データ～
正式国名 ブラジル連邦共和国
面積 日本の約22.5倍
時差 約12時間
言語 ポルトガル語
カマデプイ 13時間
- (2) **人種のるつぼ** この地には、元々先住民のインディオが暮らしていましたが、ヨーロッパの大陸発見により16世紀以降にはポルトガル人が入植してきて、とうきび栽培等のため、インディオを奴隷にし、さらにアフリカから黒人を輸入して労働力として使わせました。18世紀にゴールドラッシュが起こります。リオデジャネイロはダイヤモンドの集積地として栄え後の首都となります。奴隷開放以後は労働力不足を補うため、ドイツ・イタリアへ大量に移民を要請しました。日本はこれに遅れ、主にブラジル州に入植し、農業や養鶏を営みました。他にも世界各地からブラジルに入植し、その国の文化を持ち込みブラジルに溶け込みながら生活しています。ブラジルには、インディオ系、アフリカ系、ヨーロッパ系、アジア系、そして様々な人種との混血が進んだ多様な顔の人が暮らしています。国内旅行をすると、緯度や州によってその構成が異なります。異なる人種構成・気候風土・習慣等によって作り出されてきた文化や生活習慣の違いもまた興味深いものがあります。人口 約2億768万人(2012年総計)
人種 他民族国家
言語 ポルトガル語
独立年 1822年
奴隷制 1850年
気候 亜熱帯性気候
宗教 カトリック
首都 ブラジリア
- (3) **リオデジャネイロ市** リオデジャネイロは海に面したブラジルの大都市です。1808年にポルトガル王室がリオデジャネイロ（以下、リオ）に移ると、多くのポルトガル人が移り住みました。市はヨーロッパ風に整備され、学校、図書館、病院が建設されました。ヨーロッパ風の建物がヤシの木や蔦植物に囲まれているのはなんとも不思議な佇まいです。また、丘の上に立つコロコバードのキリスト像、岩山ポンヂアスーカル、楽曲にもなった「コパカバーナ」や「イパネマの娘」で有名なビーチがあります。これらの自然と人が作り出した景色は「カリオカの景観群」として世界遺産に登録されています。そして、リオと言えば「カーニバル」。黒人を起源とするサンバの踊りや楽器が鳴り響く、陽気で開放的なお祭りです。有名なリオのカーニバルは、サンバ会場で数日間に渡り毎夜豪華に繰り広げられます。1チームは約4千人。10台に及ぶ巨大な山車、派手な衣装や羽飾りを身に付け踊るダンサー、 bateria（楽器隊）等からなります。1軍のチームは14チームあり、数日間かけてこれらのチームが繰り広げるカーニバルは世界最大とされています。開催一月前か



らは、あちこちブロッコ（地元に根づいたカーニバル）が開かれ街はカーニバル一色になります。

2 リオデジャネイロ日本人学校

- (1) **学校の設立** リオデジャネイロ日本人学校は、石川島播磨重工（現 IHI）が、イシブラス造船所に派遣された社員師弟の企業内教育施設（日本語補習校）を開設したのが始まりです。その後、ブラジル経済の好景気により進出する企業が増え、日本人学校設立の気運が高まり 1971 年リオデジャネイロ日本人学校として設立されました。その頃の児童生徒数は 400 名を超していました。学校はサンタテレーザ地区に広い校舎と全天候型の運動施設、25m プール等を有していましたが、ブラジル経済の悪化に伴う企業の撤退、学校周辺に貧民窟（ファベラ）が林立し、頻繁に銃撃戦が起これ校舎やプール内で銃弾が見つかるようになりました。経済的問題と安全確保の問題から、10 年ほど前には校舎移転を余儀なくされました。
- (2) **校舎を間借り** 現在は日本人学校設立当初の校舎だった日系協会（文化団体施設）を借り、教育活動を行っています。ここでは、日本人学校が使っていない時間帯や週末に、日系人やブラジル人の諸団体によって、日本語や剣道、空手、合気道、バドミントン、卓球などの文化・スポーツに親しむクラブが催されています。また、七夕、餅つきなどの日本の伝統的なお祭りや、ブラジルのフェスタ（お祭り）が毎月のように開かれ、たこ焼きや焼きそば、手巻き寿司などの屋台が出て縁日を思わせます。日系人や日本文化に興味のある人が集い賑わいます。
- (3) **児童生徒数** 現在の児童生徒数は小・中学校合わせて 10~20 名で、世界の日本人学校の中でも有数の小規模校です。中南米はこうした規模の日本人学校が多いです。児童生徒数は少ないけれど、人や本物との出会いは世界一を目指しています。



3 学校の特徴

- (1) **安全対策** ブラジルの治安はよくありません。銃社会で犯罪が非常に多く、オリンピック後はさらに悪化しています。私自身も幾度か怖い思いをしたことはありますが、子どもたちも職員家族も大きな犯罪に巻き込まれずに帰国することができたのは、ひとえに総領事館からの情報、日本人学校のスタッフ全員で持ち続けた危機意識、生活しながら磨いてきた危機回避能力のおかげです。しかし、3年目の長期休業中の夜、この施設で戦慄の走る事件が起きました。裏山から武装集団が侵入し活動中の団体全員から身ぐるみ剥いで逃げるといふ事件が起き、治安の悪さを痛感することになりました。子どもたちを通学させるためには、絶対的な安全確保が必要です。そのための対策が急ピッチで進められました。侵入経路とされた隙間には猫一匹入れない強固な鉄条網を張り巡らせ、武装したガードマンを増員、職員室にはパニックルームとしての備え、さらに鉄の重い扉や防弾ガラス等が備え付けられました。他にも、日常的に気をつけなければならなかったのは、蚊による感染症対策でした。デング熱、ジカ熱は、スタッフはじめ身近な人がかかっていました。3年目には黄熱病が流行し始めました。致死率の高いこの

病気にかからないように、ブラジル全土でワクチン接種が励行されました。この感染症予防のため、日常的に虫除けを塗る、場所によって服装を変えるなどして気をつけていました。こうした治安や感染症の情報は、教育活動を行う上で欠かせない配慮事項でした。

(2) **学校行事** 年間を通じてリオならではの活動がありました。

1 日本語モデル校との交流 同じ校舎で日本語を学ぶ、ブラジル人や日系人の人たちとの交流。日本文化や遊びを紹介したり、おにぎりを握って食べたりしました。オリンピックの年は一緒にパラリンピック競技の「シッティング・バレー」で言葉や年齢、運動能力の壁を超え楽しみました。このモデル校の生徒とはお手紙交流もしています。

2 連邦大交流 日本語を学ぶ学生さんとの交流会。子どもたちは、日本文化を伝えたりクイズを出したりします。学生さんからは、子どもたちが寄せた質問に答えてもらいます。学生さんにとってもネイティブとの貴重な交流の機会となっています。(写真)

3 運動会 従来の学習成果を発表するものから、アメリカンスクールに通う小・中学生、日系企業の人達、交流のあるブラジル人学生さんや保護者を招き、仲間意識を育む運動会を目指しました。ブラジル人学生さんたちは、日本の運動会を楽しむだけでなく、様々な競技で頑張る子どもたちをノリノリの応援で盛り上げてくれます。この原稿に音が付けられるならば、皆さんにお聞かせしたいくらいです。



4 文化祭 運動会同様に、来場者と一緒に作り上げる文化祭を試みました。3年目には、連邦大交流で「リオデジャネイロ音頭」を作りました。音頭には、リオの有名な景色や食べ物、生活などのリオから連想される魅力を歌詞に盛り込み、そこに教員が曲を付け、踊りは子供たちと学生さんたちとで考えました。文化祭当日にはこの音頭を来場者全員に踊ってもらいました。

5 日本祭への参加 リオでは毎年8月にフラメンゴ海岸で日本祭が開かれます。日本の食べ物が好きの人、アニメ好きでコスプレをした人、日本文化に関心のある人など大勢集まります。日本人学校は舞台上でエイサーを披露し、ブラジル人の視線を集めました。



6 遠足・写生会 リオは、入り組んだ海岸、街のあちこちに突き出た巨岩、ポルトガル様式の建物、高い所から眺める景色は抜群です。下調べを念入りにして子どもたちに素晴らしい景色と触れ合わせる機会としました。



7 宿泊教室 リオ近郊で実施。日産工場見学、乗馬体験、イーリャグランジ等、毎年構成学年を考慮した場所や内容で行っています。

8 修学旅行 主に小学5年以上から中学生を対象に行います。首都ブラジリア、金や宝石の採掘で栄えたオウロ・



プレット、日系人が多く住むアラサツバ・弓場農場などが旅行地に選ばれ、ブラジルの現地理解や日系人との交流の機会となっています。

- 9 お正月会 日本企業の人や交流のあるブラジル人など、多くの人を招待します。お餅つき、習字、日本の昔遊びなど、様々な日本文化体験コーナーを設け来場者に楽しんでもらいます。



- 10 邦人との出会い リオでは日本以上に邦人と出会い、本物と接する機会に恵まれました。リオならではのものに接したり、いきいきと活躍する邦人と出会ったりすることは、子どもたちがリオにいることを肯定的にとらえる一助となったはずです。

邦人との出会い

- ・日本女子バレーボール代表のテストイベント参加
- ・サンバダンサーによるサンバ体験
- ・自衛艦リオ寄港によるイベントに参加
- ・秋篠宮殿下・紀子様来校時のお出迎え、歌の披露
- ・井上康生監督率いるオリンピック柔道テストイベント参加
- ・三井物産出資の鉄道事業 Super Via 見学
- ・大友良英さんの打楽器体験教室



4

オリンピック・パラリン

ピックとの関わり

派遣2年目、ブラジルはオリンピックの年でした。開催都市であるリオデジャネイロに偶然居合わせた私達。この世紀の祭典が子どもたちにとって自分事として受け止められ、有意義なものとなるよう様々な計画を立てました。

- (1) 学校の企画 学校で企画したものの一つ「応援メッセージづくり」を紹介し、オリンピック・パラリンピックに出場する選手全員にメッセージ書きを職員で分担して集めた競技や選手の情報を紹介し、カードにメッセージや絵を書かせ、日本」の文字となるように並べました。このメッセージ（視覚障害の選手には点字で作成）



総領事館をお願いし、選手村に掲示してもらいました。応援メッセージを見た選手や関係者から、返事をもらいました。体操男子団体関係者からも写真付きで返信があり、これには子どもたちも大喜びでした。パラリンピック選手に向けたメッセージは、車いすの選手用に高さを配慮し、視覚障害の選手には点字でメッセージを書くなどの工夫を施しました。地球の反対側で言葉が通じず異なるものばかりの環境下、目にする子どもたちの応援は一時の安らぎとなったはずです。

- (2) 領事館や日本の各種団体からの要請 総領事館やJOC等の要請を受け、オリンピックに関わる数々の機会を得ました。校長が中心となって、教育的効果、行き帰りの交通手段と安全確保、準備、応援等について話し合い、会議・会議の毎日でした。要請にはできる限り応え、子ども

たちにこの貴重な機会を味わわせました。子どもたちの考えた応援コールや横断幕等は、何度も披露することになりました。子どもたちは毎日取材を受け、メディアに登場していました。総領事館による要請や仲立ちがなければ、こうした経験をさせてやれなかったと、その有難さを振り返ります。

- (3) **オリンピック観戦** 私もマラソン女子の沿道応援、体操男子団体決勝、テニス、そして、陸上等の競技を観戦してきました。陸上ではウサイン・ボルトの 100m と男子リレーの決勝が行われました。会場にボルトが現れると、会場全体がフラッシュで瞬き、国や人種を越え彼を称えました。ボルトは国境を超えたスーパース



ターであることを実感しました。

5 低学年担任として

3年間、数少ない小学校教員として低学年の担任をしました。

- (1) **多様な背景をもつ子の応援団として** 保護者や子どもたちの願いには、学校が安心して楽しく過ごせる場であること、元気に遊び体力増進が図れること、帰国を見据え正しい国語力・学力、日本文化や生活習慣を身につけること等があります。リオでは現地の幼稚園やアメリカンスクールに通っている子、他国から来た子など様々な背景がありました。日本のように様々な日本語のシャワーを受けられない環境において、学校は子どもたちの国語力を育む重要な場となります。低学年児童には、十分な日本語の環境下になかった子が多数いました。単語一つとっても知らないことがあるのです。日本ではごくごく当たり前と思うようなことでも、一つ一つ大切に、丁寧に教える必要がありました。海外の日本人学校であっても、やはり、基礎・基本の積み重ねが大切なのです。また、学んだことを活用するのも国語力を磨くためには欠かせません。相手意識をもたせ、どうアウトプットさせるのかも大切なことでした。職員皆で意識して豊かな言語環境を育もうとしてきました。具体的には、苦手意識をもつ子を抽出して朝活

動の時間に個別支援する、本の読み聞かせをたくさんする、正しい話型で話すよう促す、日記を書かせ読み書きに慣れさせる、視覚からも学べるよう掲示物は日本以上に充実させる、さらに、日本の季節感や関連する言葉や文化、時には唱歌を紹介することもしました。そうした時に役立つのが図書や ICT ですが、課題となるのは、人数と予算の少ない中南米の学校で充実させることでした。地球の裏側では日本の物を揃えようとするとは桁違いの輸送費かかる上に、無事手元に届く保証はありません。図書購入には賛同を得られ、継続して購入してこられました。運営委員会や保護者、企業の人に願いを聞いてもらう機会もあり、以後、帰国する家庭から図書がダンボール単位で寄せられるようになり、図書は充実してきました。新しい本が届いた図書室に、子どもたちは入り浸りとなり、本の話題で溢れるようになりました。

- (2) **生活科** 日本の生活科は、四季の変化に富んだ自然と共に育まれた文化・生活習慣に軸を置いています。年中沖縄のように暑く気候風土が大きく異なるリオで同じことはできません。一般の人が畑を作ったり昆虫を探したりすることはありません。材料の入手も一苦労です。そんな状況なのに、この学校では一年の終わりに、保護者や関係者を招いた「リオタイム発表会」で、低学年も学習成果を発表するというのです。ここで一体何ができるのだろうか？ 試行錯誤の始まりでした。日本の教科書でできることは同様に、または少し工夫してやるものの、一番困ったのは四季の変化の中で気付きを得る活動でした。試行錯誤の上、子どもたちが喜び発展的に学べたのが「ブラジルフルーツ」の学習でした。様々な果物と出会わせ、五感をフルに使った活動ができるようにしました。学校の用務員ジョアンさんや博識な事務長さんの応援も受けました。ジョアンさんは果樹に詳しく、施設周辺の果樹を一つ一つ教えてくれました。また、バナナが食べ頃になると採って食べさせてくれもしました。これには子どもも大人も大喜び。しかし、甘臭いジャックフルーツを採ってきてくれた時、好みは大きく分かれました。それが面白いと、テーマを選びアンケートを取ってまとめる子がいました。学校周辺の果樹マップを作る子もいました。バナナの花と実の出来方の面白さ、事務長さんは、フェイラ（青空市場）見学に自ら率先してついてきてくれました。長年のブラジル生活で知った果物の情報を教えてくれました。その一つ、パパイヤが種の色で雌雄に分かれることに驚き、パパイヤについてまとめる子もいました。わかったことは、まとめたりクイズにしたりし、リオタイム発表会はブラジルフルーツのあれこれを紹介する面白いものとなりました。他にも、フェイラ見学で使うポルトガル語の練習や買い物ごっこ、果物や野菜の、日本語-英語-ポルトガル語の言い方を表にまとめるなど、ブラジルフルーツを題材にした学習は広がっていきました。



6 リオデジャネイロに暮らして

- (1) **食生活** 単身者は帰宅すると家事が待っており、飲料水や食材の調達、修理の依頼等、日暮れの街へでかけます。負荷が高くも、これは現地理解を進める後押しになりました。リオは暑さやポルトガルからの影響か味付けが濃く、お肉やパンは塩味が濃く、お菓子は歯にしみるほど甘く、健康を害しそうなものが散見されます。塩や胡椒、ニンニク、砂糖をふんだんに使う事が贅沢の象徴だった時代の影響が残っているのかもしれませんが、しかし、ブラジルには豊かな食材があります。赤身の牛肉、豊富な南国フルーツやアサイーのような珍しいアマゾンフルーツ、更に日系人が育てている日本米や野菜、日系や中華系の食材店で入手できる高価な調味料。これらの入手方法が分かり、日を追う毎に豊かな食生活を手に入れることになりました。新しい食材との出会いと調理は楽しみの一つになりました。
- (2) **言葉とブラジル人** 日本では「英語は世界の共通言語」と言われていますが、そうでない国があることを初日から痛感しました。言葉を知らずに飛び込んだため、身振り手振りを駆使し、時に絵に描きながら意思伝達を図りました。しかし、私が接した多くのブラジル人は驚くほど優しい人たちでした。すれ違う時には必ず挨拶をし、困った様子があるとすぐに助けてくれます。片言でもじっと最後まで聞き、理解しようと親身になってくれます。また、レジや観光地の列、電車などで、子連れのお母さんやお年寄り、体の不自由な人を見かけると、ブラジル人はそれが当たり前であるかのように、真っ先に声をかけ譲ったり手を差し伸べたりします。また、挨拶を重ね顔見知りになると、とても親切にしてもらえるようになりました。パン屋で「焼きたてのクロワッサンを出してあげるから10分後においで」と声をかけてもらったり、毎週末新鮮な食材を求め通った青空市場では、鶏肉や魚を調理しやすくさばいてくれたりと、本当によくしてもらいました。もっと言葉を話せたらより親しくなれるのに、何でも質問して生活が便利になるのに。そんな歯がゆさが言葉を学ぶ原動力となっていました。3年目、気がつくると近所は顔見知りでいっぱいになりました。「来月、日本に帰るよ。」と伝えると、反応は様々。帰国を喜んでくれる人、無言になる人、涙を浮かべる人。縁もゆかりもなかったブラジルで、こうした優しい人たちに支えられてきたことを改めて感じました。
- (3) **リフレッシュ** 人との出会いや繋がり、リフレッシュを仕事同様に大切にしてきました。週末はテニスクラブで仲間と汗を流したり、時に有志で作ったリオ登山部で登山をしたりして積極的に体を動かすようにしてきました。また、リオは大都会。時にはボサノバやショーロを聴きに行く、オーケストラで演奏されるバレエの舞台を見る、サンバ教室で踊りを習うなどして文化にも親しみました。こうした場に、同僚やその家族、仲間を誘い親交を深めました。ホームパーティーに仲間を招き、手巻き寿司や鍋など日本食を食べ、多くの人と繋がれたのもよき思い出です。
- (4) **派遣決定から派遣されて** 派遣が決まった時、遠く情報も無い国のために怖いという思いが先行し躊躇する期間があ



りました。数々の励ましをもらい初心にかえれたことで、新しい世界への期待感がフツフツと沸いてきました。そうした場所だからこそ、一人一人の存在感が大きく活躍の場が多くあるのではないか……。実際、渡航すると、小規模校の経験のある小学校教諭として、久しぶりの女性の派遣教員として、そして個人的なこととなりますが、書道免許をもつ者として活躍の場がありました。校内の書写指導や掲示物作成はもとより、総領事館から依頼されるイベントの看板や賞状、お正月会で書道の体験コーナーを担当するなど、日本以上に筆を持つことに。得意分野で役に立てるのは嬉しい経験でした。



- (5) **帰国して** 目を閉じると、ブラジルのどこまでも広大な自然とお世話になった人たちの顔が浮かんで来ます。満月の夜にしか見えないというルナ・レインボーを求め、仲間とイグアスの滝まで行き、漆黒の闇の中、月に照らされた滝と轟音に、ブラジルにはこんな所があるのかと驚いたこと。パンタナール大湿原の多様な動植物。どこまでもどこまでも広がる緑と水のアマゾン。カーニバルの陽気。優しいブラジル人。ポルトガル語や音楽。初めて目を向けた中南米の歴史や人々の暮らし。3年間では知り尽くせなかった数々のこと。日本人学校の子どもたちと仲間、挑戦することで繋がった多くの人たち。思いおこすと感謝とともに温かいものがこみ上げてきます。今は在籍校に戻り、少しずつブラジル生活で知ったことを紹介しています。子どもたちからは、「この鳥、札幌のイベントで見たよ!」「ブラジルのことがニュースになっていたよ!」など、地球の反対側の事物に関心を持ち始める様子があります。子どもたちが世界の様々な事物に関心をもったり自分の故郷を見つめ直したりと、世界の扉を開く手伝いをする存在になれたらと願います。